哲學研究　第八十三號

公羊家の文化階段說

小島祐馬

こゝに公羊家と曰ふは、孔子を祖述する儒家の一派である。孔子は『春秋』を作つて自分の意見を之れに寓したと言はれてゐるが、後世その所謂意見といふものが如何なるものであるかといふことに就いて、人々觀方を異にし、種々の解釋が出たのである。其中でも公羊傳、穀梁傳、及び左氏傳といふ三つの解釋が最重要視された。こゝで公羊家と曰ふは卽ち春秋左氏傳春秋穀梁傳を奉ずる學派に對して、春秋公羊傳を奉ずる學派に名づけた名稱である。此外支那の學問では今文家古文家の區別を言ふ。元來今文とは漢代に於いて其當時行はれた文字卽ち隸書のことを謂ひ、古文とは之れに對して秦以前に行はれた古き書體の文字を謂ふ。漢代には此兩樣の文字で書いた經典が有つたのであるが、然るに今文で書いた經典と古文で書いた經典とは本文の內容を異にするものあり、又た今文古文の一方にのみ傳はる傳記注釋あり、之れを治むる者の間に自ら學風の相違を生じ、遂に斯かる學派の對立を見るに至

つたものである。而して前に述べたる春秋左氏傳を奉ずる學派が古文家なるに對し、公羊傳を奉ずる學派は今文家に屬して居り、且思想上では獨り公羊家が今文家全體を代表するが如き觀があるのである。

猶公羊家の學は他の今文家の學と同じく前漢の時代に榮えたが、後漢時代古文家の學が隆盛となると共に衰へ、其後唐宋元明の間殆んど之れを顧みるものが無かつた。清朝に至つては初めは後漢時代の古文家の學を復興し、所謂訓詁考證に努めたが、道光以後卽ち今より百年ばかり以前より其反動として義理を主とする前漢今文家の學が復興され、從つて公羊家の學も一時隆盛を極めて以て清末に及んだものである。されば公羊家の學といへば大體に於いて漢代と清末との二期を以て盡くされてゐるわけである。

以下述べんと欲する所は之れを部分的に觀れば予が既に『支那學』『變文』『經濟論叢』等に發表せしものと一致するもの多きに居るも、而もこゝではそれ等を綜合して之れを文化階段說といふ一の史學理論として考察せんとする所に從來の叙述との相違が存するのである。

是れより公羊家の歷史に關する一見解、卽ち予の私に名づけて文化階段說と稱す

るものを紹介せう。それには先づ漢代に於ける代表的の公羊學者の著述である董仲舒の『春秋繁露』何休の『春秋公羊解詁』により其概要を述ぶることゝする。此等の學者によれば公羊學には次の三つの大なる原則がある。それは「存三統」「張三世」「異外內」といふことである。

「存三統」といふは如何なることであるかといふに、一言にして掩へば易姓革命といふことは歷史上必然的のものであるとして之れを是認するのである。『春秋繁露』三代改制質文篇には三王五帝九皇といふことを言ひ、新に王者の起るあらば、其王者に最近き二王朝の後は之を大國に封じて尙ほ王の名義を存し、新王と共に三王と稱す。それより遡りて前五代の王朝を合せて五帝と稱し、更にそれより遡りて前九代の王朝を九皇と稱す。五帝九皇と現在に遠ざかるに從ひ稱號は尊くして實權は無くなるのである。されば易姓革命のある每に二王五帝九皇の內容は變動し、一代づゝ順次に繰上げらるゝのである。而してこれは歷史發展の過程に於いて必然的に繰返さるゝことゝするのである。公羊家の說く所では孔子が『春秋』を書く時に此原則に依つて自ら理想的の新王を立て、當時の周室をば斥けて前代の殷の後と共に二王の後として之れを存せんとするの意を示したものとしてゐる。この說は文化階段

說と直接の關係があるわけでは無いが、歷史發展の過程に觸れてゐる點に於いて亦た幾分の聯絡が無いとも言へない。

次に「張三世」といふことは文化發展の過程が三階段に分たるゝといふことである。これも『春秋』の筆法から說くのであつて『春秋』は元來魯の十二公二百四十二年間の出來事を記したものであるが、此時代を孔子自身を標準として其遠近により左の三期に大別する。

所傳聞之世(高祖曾祖の時に當る)……隱桓莊閔僖五公

所聞之世(祖父の時に當る)……文宣成襄四公

所見之世(父と己との時に當る)……昭定哀三公

而してその所傳聞の世を衰亂の時代に當て、所聞の世を升平の時代に當て、所見の世を太平の時代に當てるのである。固より歷史上の事實より觀れば春秋時代は全然衰亂の時代であつて升平太平の時代などは實際有るわけではないが、然し公羊家に從へば『春秋』に見えたる歷史上の事實は全く假借である。唯此時代の史實を假りて歷史といふものが衰亂より升平、升平より太平と、階段を追うて發展するものであるといふことを示したに過ぎないとするのである。次に「異外內」といふことであ

るが、これは外國と內國との關係の變化する過程を言つたもので、前の「張三世」と離るべからざる關係を有するものである。「異外內」とは「內其國而外諸夏」「內諸夏而外夷狄」「夷狄進至於爵」といふのであつて、是れに由れば『春秋』では外國に對する思想が前の三世に應じて異るとするのである。卽ち衰亂の時代には先づ內を詳にすることを要すと言ひ、自國內に於いて文化を發展せしむることに專心でなければならぬ。故に此時代には其國を內にし諸夏を外にすと言ひ、文化の程度の低き夷狄は勿論のこと、假令文化の進みたる諸國と雖、自國以外の國をば之を排斥するのである。然るに升平の時代に進みては諸夏を內にし夷狄を外にすと言ひ、文化の低き夷狄は依然之を排斥するも、文化の進みたる諸國に對しては最早自他の區別を設けないのである。更に進んで太平の時代に入らば夷狄の文化も大に進み、文化國と夷狄との區別は無くなり「天下遠近大小若一」と言つて世界はすべて一に歸するのである。公羊家では亦た之を大一統とも言つてゐる。卽ち衰亂の時代、升平の時代は國家主義(程度の差はあるが)の行はるゝ時代であつて、太平の時代は世界主義の行はるゝ時代である。こゝに衰亂の時代に於いて何故に自國と他國との區別を立つるかといふに、これは近きより始めて次第に遠きに及ぶのが物の順序であるが爲めである。升平の

時代に中國と夷狄との區別を立つるは文化の程度の相違に根柢を有し、夷狄の爲めに折角の文化が打破さるゝことを虞るゝが爲めであつて、全く人種的偏見などに本づくものに非ざることは何休以來公羊家の恒に說く所である。之を要するに「張三世」「異外內」といふことは、歷史といふものは文化の程度に應じて、衰亂の時代升平の時代及び太平の時代の三階段を經て、國家主義より世界主義に發展するものであるといふことを言つたものであるといふことに歸着する。而して公羊家は之を希望として述べたのではなく、之を必然として述べてゐる。單に聖人の理想と言はずして歷史發展の原理と爲してゐる。彼等は『春秋』の一書を以て實にこの歷史發展の原理を說き示したものとするのである。

然らば此等三世の文化の程度は果して如何の相違があるか。これは『春秋』のそれ〳〵の記事によつて想像するの外はないが、公羊傳には之れに就いて何等纏つた說明を下してゐない。然るに『禮記』の禮運篇中に小康の世と大同の世との狀態を寫し出した所がある。近時の公羊家はこの小康の世を升平の時代に當て、或は衰亂の時代と及び升平の時代とに當て、大同の世を太平の時代に當てゝゐる。予は禮運

の小康大同が公羊家の衰亂升平太平と、元來同一の思想から出たものとすることには疑を挿むものであるが、今日多數の公羊家はこの兩者を結び付けて考へて居り、少くとも是を以て近時の公羊家の思想と爲すには妨なしと思はるゝが故に、こゝでは姑く、禮運の記事を假つて、公羊家の所謂三世の文化の一班を髣髴せしめて置かう。

先づ小康の世、卽ち公羊家の取つて以て升平の世に當て若しくは衰亂と升平の世に當てゝゐる時代の狀態は如何といふに、此時代の特徵は天下の人皆利己心を以て活動するといふ事に存する。君主は天下を以て私家の物と爲し、子孫に傳へて之を天下に公にせず。四海の民も各其親を親しみ、其子を愛し、他人の親他人の子に及ばず。財貨を藏するは皆自己を利せんが爲めであつて、勤勞を敢てするは皆私己を充たさんが爲めである。既に各人が私を營み己を利することをのみ計る以上は爭奪擠排は到底免れざる所である。されば上位に在る者は其地位を世襲するの制度を立て、城郭溝池を爲りて以て自ら護衞する必要が生ずるのである。凡そかゝる時代に於いて最重要なるは禮である、此禮を用ひて社會の秩序を維持するのである。卽ち之れを以て君臣を正し、父子を篤くし、兄弟を睦じくし、夫婦を和せしめ、又之を以て宮室衣服車旗飲食の上に上下貴賤に應じて制度を立て、耕作の地、居住の所、亦た階級

によりて其品を異にするのである。又此時代に於ては爭奪幷行はるゝが故に勇に須つ所があり、互に相欺妄するが故に知に須つ所がある。故に軍事や權謀の必要があり勇知の士が尊重せらるゝのである。次に大同の世、卽ち公羊家が取つて以て太平の世に當てゝゐる時代の狀態は如何といふに、此時代に於ては公道が重んぜられ、私心といふものが全く行はれないのである。元來天下は天下の共有の器であつて、一人一家の私有し得る所でない。されば此時代に於ては天下を公にして聖德ある者に委ね、敢て一個人の子孫兄弟に傳ふることをせず、斯くて德行あり道藝ある者を選擧して要職に任じ政治に當らしめる。而して平素人民の一般に講習する所は誠信で、修爲する所は和睦である。固より父母は人の最親しむ所、子は人の最愛する所であるが、然し唯だ其親を親しみ其子を愛して、他人の親を親しまず他人の子を愛せざれば社會の平和は到底望まれない。そこで此時代に在りては人々其親を親しみ以て人の親に及ぼし、其子を愛して以て人の子に及ぼし以て萬民同愛の實を擧ぐるのである。既に私親私愛なく、四海一の如くなるが故に、天下の老者は皆贍養を得て其餘命を終へ、壯者は皆游民と爲らずして其業に勵み、幼者は皆保育を得て成人することを得、鰥寡孤獨廢疾の者も皆恤養を得て貧苦窮乏を嘆ずるものは無い。而して

男子、各分職ありて其才能に應じて働き、女子は各良家を得て嫁し婚期を失する者とてはない。又財貨の如きも公産ありて私産はない。但だ人若し收錄せずして之を山野に棄擲すれば天物を壞敗して資用すること能はず、故に各人收めて之を保管するのみであつて、之を藏し己の有となすのではない。若し乏しきものあらば輙ち之に施し與ふるのである。又勤勞といふことも公共の爲めにして自己の爲めにするのではない。卽ち人が勞苦を憚らず筋力を竭す所以は、自ら力を惜み産業を務めずして、專ら養を人に仰ぐを嫌ふが爲めであつて、全く自己一身の利益の爲めに營爲するものではない。さて此の如く天下一心、親の如く子の如くに和睦したならば、權謀術數などゝいふことは施すに所が無いのである。人々敎養を公産に待ち、乏しき者あらば輙ち施し與ふるが如くならば盜竊亂賊はいかにしても起りやうがない。されば此時代に於ては人家に扉を設くるも敢て捍拒する所あるが爲めでなく、專ら風塵を防ぐ用に供するのみであるといふのである。

以上は漢代の公羊家の思想及び後世から公羊說に結び付けた漢代の思想に就いて述べたのであるが、尙ほこゝに淸末の公羊家の學說一二を附け加へて置きたい。

清末の公羊家では康有爲の如き其數多き著書の中で頻りに大同の說を高調してゐるが、就中『大同書』は彼の此方面の思想を窺ふに最便利なるものである。これによれば彼は今日の如く多數の國家が對立して居る狀態では戰爭は絕ゆる機なく、人民はいつまでも塗炭の中に苦しまざるべからずとし、民を安んずるには兵を弭めざれば不可、兵を弭むるには國家を去らざれば不可、國家は亂世に在つて已むを得ずして自ら保つの術、平世に在つては最爭殺大害の道であるとしてゐる。然るに今日の勢一朝一夕に國家を破壞し去ることは不可能である。故に彼は先づ國家の聯合を劃し、これを以て大同に進むの階梯と爲すべしと言つてゐる。而して彼は國家聯合の一として各國平等聯盟といふことを說いてゐる。それは勢力相等しき强國が訂盟して兵を弭め、諸小國之れに從ふを謂ふのである。更に進んでは聯盟の代りに公政府を立て、これを以て各國家を統一する。此公政府の基礎漸次鞏固となると共に各國家の色彩は次第に薄らぎゆきて、遂には總べての國家は皆無くなり、唯一つの世界となる、これが卽ち大同の成就せる太平の時代なりと爲すのである。而して此時代に至らば固より國境なく、人種の別もなく、貴族平民の階級なく、帝王もなく大統領もなく、全地の海陸皆公有に歸し、人民は皆私產なく、平等に公に養はるなどゝ言つて

ある。斯くの如く康有爲の大同の說は一の理想を述べたものであつて、歷史發展の過程を說いたものではないが、然し彼とても公羊家の立場から必然的に太平の時代の到來することを信ぜざるものではない、たゞ一日も早くそこに到達せんことを希望するが爲めに、自然の推移に任せず、人爲的に之を速進する手段を講究したに過ぎないのであらう。

こゝにまた康有爲よりは先輩で廖平といふ學者がある。彼の今日までの著述は此頃『六譯館叢書』の中に略ぼ纒められてゐる。廖平は勿論公羊家であつて、もとは今古文の區別をやかましく言つたものであるが、後には此等の區別は誤つてゐたと爲し、總べての經書は孔子が其認むる所の文化の歷史的階段に應じて作つて置いたものであつて取舍すべきものでないとした。而して獨り『春秋』に限らず『尙書』も亦た全く歷史發展の階段を示したものであると言つてゐる。是れは今まで公羊家が『春秋』に對して取つた態度を、推擴めて他の諸經にまで及ぼしたものである。彼に從へば歷史發展の過程は先づ四つの階段に分たれる、名づけて皇帝王伯と曰ふ。伯と王とは小康の世卽ち國家主義の時代の二階段に名づけたものであつて、帝と皇とは大同の世卽ち世界主義の時代の二階段に名づけたものである。而して歷史は

伯の時代より王、王より帝、帝より皇の時代へと進むのである。斯くて王伯時代の原則は『春秋』に見え、その制度は『王制』に在り、皇帝時代の原則は『尙書』に見え、其制度は『周禮』に示されてゐるとし、そして『春秋』『王制』によつて王伯の學を爲すを小學と名づけ、『尙書』『周禮』によつて皇帝の學を爲すを大學と名づけてゐる。然るに彼によればこの小學大學ともに地球上の人學である。これに對して天上の世界があり、之を究むる天學が無くてはならぬ。天學は至極精微のもので到底言語文字を以て盡し難いが、今最解し易きより說明すれば、『中庸』に至誠至聖至道至德といふことあり、誠聖道德の上に至の字を加へてある、蓋し其道德至極にして復た加ふべきものなきを謂ふのである。此至の字が卽ち天學の標目である。時としては又至の字に代ふるに大の字を以てすることもある。然るに物窺まれば必ず變ず。至仁無親、大智若愚。大抵仁なれば親あるものなるが、仁が至り盡くれば則ち親は無くなる。普通に智者といへば賢なるものであるが、智が大となれば却つて愚の如くなる。大德無爲、大孝不仁の如き亦た同樣である。天學の取扱ふ世界は此の如き世界である。人學では聖人を以て止境としてゐるが、天學では至人神人を以てその對象としてゐる。而して人學の原則が『春秋』『尙書』『禮』に見えてゐるに對し天學の原則は『易』

『詩』『樂』に於いて見はれてゐるとしてゐる。蓋し人學は卑近なるが故に『春秋』『尙書』『禮』に明に之を言ふことを得るも、天學は高遠なるが故に『易』『詩』『樂』によつて之を歌詠卜筮に託するの外、言ひ表はし方がないとするものである。要するに廖平の說では歷史といふものは伯王帝皇と國家主義から世界主義に進むのであるが、世界主義に至つて政治は行き詰る。それ以上はどうなるかといふに、そこで全人類が藝術に遊び宗敎に浸る所の生活に入るといふのであつて、從來政治的に觀て區別した歷史發展の三階段を彼は四階段に分ち、更に其上に藝術的宗敎的の色彩を帶びたる一階段を加へ、これを以て人類文化の終局としたのである。尤これは廖平がこの二十年來說き來つた所であるが、彼は近來更に其上に人類退化の說を加へ、かくして文化の終局に達した人類は其時代を經過すると共に更に退化するものであるといふ說をも唱へてゐる。

公羊家では歷史を以て以上述ぶる如き幾つかの文化階段を經て發展するものと爲すのであるが、それでは其發展の原動力となるものは果して何であると考へたかといふに、それは一般に儒家の唱道する所の仁といふことに歸着すると思ふ。董仲

舒の『春秋繁露』にも到る處に仁の說を高調してゐる。今其一二を示すならば、俞序篇には、「『春秋』の道、大に之を得れば以て王たり、小しく之を得れば以て霸たり、霸王の道は皆仁に本づく、仁は天心なり」と言ひ、又宋の襄公が其道に由つて敗れたるを賞し、『春秋』では之を貴び以て習俗を變じ王化を成さんとすと言つてゐる。又仁義法篇には「僖公の遠きを恤む所『春秋』は之を美とす、其遠きを恤むを美とするの意を詳にすれば天地の間然る後其仁に快うす」と言ひ、又「王者は愛四夷に及び、霸者は愛諸侯に及び、安者は愛封內に及び、危者は愛旁側に及び、亡者は愛獨身に及ぶ、故に曰ふ、仁者は人を愛し我を愛するに在らず」などゝ言つてゐる。要するに仁愛の博くして普きを以て『春秋』の道と爲すのである。尙ほ今一つ近代の公羊家の中より代表者として譚嗣同を擧げて置かう。彼は其著『仁學』に於いて仁の屬性をいろ〳〵と述べてゐるのであるが、其中主なるものを言へば彼は先づ日新といふことを言ふ。自然現象にしても天地新ならざれば物を生ずる能はず、四時新ならざれば寒暑互に更ることを能はず、人類社會も之と同じく活動がなくなれば生計は絕え、生計絕ゆれば人類は滅亡する。故に日新といふことは人生の公理であると言つてゐる。次に仁の屬性中嗣同が最力說したものは通といふことである。仁は其自然の發現のまゝに任せて

置けば本來通ずるのであるが、人類社會に在りては仁の作用を自然に一任して置くこと能はず、種々技巧を弄して故らに之を壅塞してゐる。此壅塞を取去つて始めて仁の作用全きを得るとするのである。そこで彼は通の四義といふものを擧げて居る。曰はく人我通、曰はく男女內外通、曰はく上下通、曰はく中外通と。人我通とは他人と自分との差別を去るのである。男女內外通とは男女の差別を去るのである。上下通とは上下貴賤の差別を去るのである。中外通とは自國と他國との差別を去るのである。此四通が實現された時は卽ち仁が最よく發揮された時とするのである。此等の說に由つて之を觀れば公羊家の文化階段說は仁を以て其發展の原動力と爲してゐることが略ぼ想像さるゝのである。假令特に明かに仁を說かざる公羊家と雖、それが一般儒家としての立場より其學說の根柢に仁を豫想してゐるものであるとすることは敢て不當の推定でもあるまいと思ふ。

さて公羊家は以上の思想を以てすべて孔子に歸してゐる。勿論それは孔子の思想をだん〳〵に敷衍して行つたものには相違あるまいが、然し斯くして出來たものが孔子自身の思想とは自ら別種のものであることは今更絮說するまでもあるまい。

なほ支那人の歴史の觀方は、例の所謂尙古癖なるものに囚はれて、上古を以て羨むべき黃金時代と爲し、現在に近づくに從ひ次第に衰頽し墮落したものと觀るのが普通である。想ふに支那古代の聖賢が其理想社會を描くに當つて、之を將來に描かずして過去に描いたのは、實際的なる支那人に對しては漠然たる理想を未來に指示するよりも、是れは既に過去に於いて實現せられたる所、之れが再現に努むべしといふ方、人心に入り易きが爲めであつたであらう。從つて作者自身の意は決して過去を尊重するに非ず、過去の事實を假りて將來に理想社會を現出せしめんとするに在るも、それが誤つて單に過去を尊重するの思想を釀成し、現在及び將來に向つて絕望の念を抱くに至つたが爲めにかゝる歴史の觀方をするやうになつたものであらう。公羊家の歴史の觀方は之れに異り、社會は過去よりも將來に向つて次第に文化の進むものなるを說く點に於いて、支那一般思想の型を破り、獨り異采を放つてゐる觀があると思ふのである。（完）